ティーチング・ポートフォリオ

大学名　人間総合科学大学

所　属　ヘルスフードサイエンス学科

名　前　本山陽子

作成日　2023 年 9 月 28 日

1．責務（何を行っているか、何を果たしているか）

私は、人間総合科学大学のヘルスフードサイエンス学科の教員として、栄養士必修、食品衛生管理者・食品衛生監視員必修、公益社団法人日本フードスペシャリスト協会の認定資格、一般社団法人日本食品保蔵科学学会の認定資格に係る科目を担当している。その他、就職対策ワーキンググループとして1 年次より就活に必要な知識や心構えがもてるよう、また、 4 年生担任としても就職活動の支援を行っている。

本学では、社会で活躍するための社会人基礎力を身につけるため「右手にライセンス、左手に生きる力」を合言葉として、専門職としての資格取得を推奨している。特にヘルスフードサイエンス学科では、栄養士を始め多くの資格が取得可能である。私は、学生が自分の望む進路のために役立つ資格を取得できるよう、また社会人となった時に実際に活かせるよう、基礎知識および技術の習得を基本に現場での応用力を身につけることを目指し、授業を行っている。また、専門職として活躍するためには周囲とのコミュニケーション力は欠かせない。4 年間で十分なコミュニケーション力を培うため、すべての科目でコミュニケーション力の涵養を目指している。

2023 年度の担当科目は以下の通りである。

前期

授業科目名	対象年次	コマ数	資格関連
コミュニケーション演習	1	15 コマ	
給食計画論	1	15 コマ	栄養士
総合調理実習	2	48 コマ	栄養士
給食経営管理実習（通年）	3	10 コマ	栄養士、HACCP 管理者
公衆衛生学Ⅱ	3	15 コマ	栄養士 HACCP 管理者
栄養分析学実験	3	1 コマ続き×12 回 （うち 5 回）	栄養士
卒業研究（通年）	4		

後期

授業科目名	対象年次	コマ数	資格関連
給食の運営管理論	1	15 コマ	栄養士
給食経営管理実習（通年）	3	5 コマ	栄養士、HACCP 管理者
公衆衛生学Ⅰ	3	15 コマ	栄養士 食品衛生管理者・食品衛生監視員 フードスペシャリスト HACCP 管理者
食品官能評価	3	15 コマ	栄養士、HACCP 管理者（選択） フードスペシャリスト（選択）
卒業研究（通年）	4		

２．理念（教育に対する考え方）

人は自ら興味を持ち、学びたいと思わない限り、学べないと思っている。教員ができることは、興味を持たせ、学びのハードルを下げるために知識を理解しやすくすることだと考えている。栄養学をはじめとした学問は日進月歩である。また、社会に出てぶつかる問題は多岐にわたる。しっかりとした基礎知識を身につけ、自ら知識のアップデート、また、現実の問題への対処ができる専門職を育てたい。

３．方法（教育方法において大切にしていること）

基本的な授業構成として、集中力を途切れさせない、飽きさせないため、授業を 3 から 5 のパートに分け、テーマと習得目標を定めて、パートごとに学修内容の確認を行う構成としている。

基本的な知識の習得に関しては、授業内での振り返りに選択問題や穴埋め問題を多用している。翌週に小テストを行うことで知識および学修習慣の定着に努めている。コミュニケーション能力の向上と、説明や対話を通して知識を深め、協力することの重要性を学ぶグループ学習（LTD）を積極的に導入している。定期試験では、管理栄養士国家試験をはじめとする資格試験の問題を想定し、授業での問題を過去問として、勉強するようにし、資格試験問題に慣れ、対策のとり方も習得できるようにしている。

単なる知識の習得にとどめず、意欲をもって主体的に学びを深めるため、学生が興味をもった問題をテーマとして、レポートを作成することにより、意欲の向上を高め、現実にある問題に対して、どのように解決が可能であるか、自ら考え、意欲をもてるように努めている。

可能な限り体験を導入し、体験を通じて学んだ知識を元に、自分で考え応用することで、知識を生きた知識とすることを大切にしている。

学びの場は教員一人で作るものではなく、学生とともに作るものだと考えている。学生の意見は積極的に取り入れ、柔軟に運用し、学生の成長をサポートするよう努めている。

４．成果（学生さんからの評価に対して、学生さんの学修成果について）

各種資格試験問題を想定し、基礎知識の確認を行った。すなわち、授業内の問題を過去問題と想定し、類似した問題に答えることで、知識の確認を行った。全体としてはよいが、一部に学修方法が理解できていない者、また、授業外での学修ができていない者がいるようであった。学修方法については、授業内で丁寧に説明する時間を設け、小テストの結果を見て、繰り返し説明し、授業外の学修を進められるようにガイドしていきたい。

体験型や学生が主体的に取り組める課題については、学生の取り組む意欲が高く、満足感が高かったため、引き続き、可能な限り採り入れていきたい。

５．目標（教育活動の中短期目標と達成時期）

・授業外に復習を行い、小テストに備える学生を最終的に自己申告ベースで 6 割以上とする。
・体験学修を主体的な発展学修につなげるため、体験学修時のまとめに最終的に行う自由課題について考える時間を設ける。
・自分の興味に従い、より意欲をもって発展学修（レポート作成）を行うため、集約的だったテーマをより多様性のあるものにする。

【添付資料】

シラバス（および授業計画書）、配布資料、学生アンケート